一枚の召集令状（赤紙）が人生を奪う

谷口正大

昭和20年（1945年）5月の初旬だったと思います。見慣れない男性がわが家を訪ねてきました。母が応対に出た男は、何か封書を母に手渡しました。

その手渡された「赤紙」から私達の日常と将来が全て変わってしまった。父は大連一中の歴史の教師でした。年齢も40歳を過ぎ軍隊経験のない父に赤紙が来るとは、母も正直思っていなかったと思います。終戦間際になってソ連が日ソ不可侵条約を一方的に破棄し満州に攻め込んできたために、満州に在住していた男性は根こそぎ北満に送られました。

そのすべての兵士は8月の終戦とともに武装解除されソ連軍の捕虜として帰国させると騙され、シベリアに捕虜として抑留され、約7万の日本人捕虜が寒さと栄養失調のため死亡しました。

父は昭和21年1月に栄養失調で死亡しましたが、私たち家族が父の死を知らされたのは昭和23年頃だったと思います。

母は幾度かシベリアからの復員船が入るという情報を耳にして舞鶴に駆けつけていました。何の情報も聞くことが出来ずに帰ってきて落ち込んでいる母の姿を見るのはとても辛かったです。又、終戦後大連に取り残された日本人は、ソ連軍の占領下で引き揚げるまでの1年半を生きていくために働かなければなりません。

まだ若かった母と年頃の姉は危険極まりないソ連兵を警戒しながらの生活でした。私が最初にやったのは姉と二人で天秤棒を担ぎ早朝豆腐を卸し売り歩くことでした。

“トーフー”という売り声が恥ずかしさでなかなか出せなかったのを想い出します。冬になってくると豆腐を入れた石油缶の水が凍り冷たさに泣かされました。大連の冬はマイナス10度以下になります。家でも石炭が無くなり家の中の材木や父の蔵書を持ち帰ることが出来ないと分かって、父に“ご免なさい”と謝りながら、燃料として使い、何とか戦後2年目の冬を過ごしました。

私たち家族はこうして無事に日本に帰ることが出来ましたが、満州北部には沢山の日本人が開拓団として入植していました。南下してきたソ連兵に追われ自分の子どもを中国人に託した、所謂「中国残留孤児」が大勢とり残されたことを思うとき、断腸の思いがします。

私は2011年9月に厚生省の企画によるシベリア数か所の日本人捕虜埋葬地の慰霊の旅に行きました。

同行した遺族の中には父親のお顔すら知らない方もおられました。悲しいことです。

今ウクライナとの戦争を思うとき、シベリアでのひと時ロシアの少年たちと遊んだことを思い、あの子たちが戦争に駆り出されていないことを願うばかりです。

この子たちは今20歳位になっているでしょうか。シベリアからは多くの若者がウクライナの戦線へと送られていると聞きます。

戦争には勝者も敗者もないといわれます。全くその通りです。

「平和の元后母マリアよ
世界に平和を与えて下さい」